子どものための 創造的リズムの動き

Creative Rhythmic Movement For Children
Gladys Andrews, Ed.D
PRENTICE-HALL, INC. Englewood Cliffs, 1954

この本は全体が十一に分れ、巻末にレコードなどの参考教材、著者目録がある、実際場面の写真、楽譜などがあり、具体的に細かく記されている。以下項目を追っていくと、

一、子どもとは

子どもは各々成長の速度も違い、考える事も感じる事も異なるので創造的リズムの動きによってそれを思う存分表現する事が出来、また社会的な集団に所属して認められたいという欲求を創造的リズムの動きによって満たすことが出来ると述べている。六才から十四才までを、「私」の時代（六～八才）・「私と私たち」の時代（九～十一才）・「私たち」の時代（十一～十四才）に区切って各々の年代の特徴・要求などをあげ、創造的リズムの動きが各々の年代に応じてその要求を満たすことを強調している。「私」の年代には思う存分自己発揮させ、「私と私たち」の年代には、成長の個人差によって起こる緊張を解消し、「私たち」の年代には性差、不安定、仲間への気遣いなどを解消する。

二、子どもと創造的経験

創造的表現の方法は、描画、詩作、劇作、歌、物語などいろいろあるが、創造的リズムの動きもその一方法で、体のいろいろな部分によって自分の気持、経験などを表現し、表現することで、学んでいく。創造的リズムの動きはいろいろな利点を持っているが、自分自身や仲間に対して好感を持ち、喜こびを共にするなどの利益がある。

三、創造的動きの経験

民主的な雰囲気、安定、理解、勇気づけ、友だちとの交わり、などがこの動きを促進させ、子どもたちの創造的な試みは決して笑われたりしてはいけない。部屋の広さは、十分な広さが望ましいが、体育館などは親密感を失うので好ましくない。

四、動き

自分の体が、表現の道具であることを、しているうちにだんだんに学んで、いろいろな表現へと発展させていく、基本的な動きを「移動」と「体の動き」の二つに分けて説明しているが、移動は、歩く、とぶ、走るなど、体の動きは振る、曲げる、伸ばす、震えるなど、各々の動きに空間の要素、リズムの要素を組み合わせる。例えば、前に歩く、速く歩くというように。

五、動きの探究

具体的にどのようにして始めたら良いか幾つかの例が上げられているが、きまったやり方がある訳ではない。まずはじめることが重要である。教師は子どもたちの発達段階、興味、以前の経験などを是非知っていなければ

ならない。「あなたは早く歩けますか？」「もっと早く」「もっともっと早く」「どれ位、ゆっくり歩けますか？」「他にどんな歩き方がありますか？」「見てごらん、私はウサギよ」とひとりが歩き出せば、皆思いおもいのウサギになり、やがて動物歩きに発展する、というように、ともかくこのようにして子どもたちはリズムを始めていく。教師はやって見せたり、子どもたちと一しょにしたり、大鼓、手、棒などでリズム打ちをしても良い。強く打ったら高くとび、弱く打ったら低くとぶというようにいろいろな変化をつける。動作の歌、子どもたちの描画、ピアノの伴奏などは動きを刺戟し、更に楽しくするが、ピアノに動きを合わせていしまうのでなく、動きにピアノを合わすようにしなくてはいけない。

六、動きの発展

移動、体の動きの二つに分けてその各々を細かく分け説明しているが、一番普通な移動「歩く」を例に上げると、先ず自由に歩かせる、高い姿勢で歩かせる、低い姿勢で歩かせる、短かく、長く、早く、遅く、柔らかく、重く、軽くなど。「他に歩き方はありませんか？」　かかと歩き、つま先、外股、内股、足を曲げる、動物歩きなど、「この歩き方は誰でしょう」郵便夫その他職業による歩き方の違い年令、その時の気持、道の良し悪し、前後左右などの方向、などといろいろに発展させることが出来る。他の各々の動きについても同じ事が言える。

七、動きにおける空間の役割

汚れた足で床を歩くと、動いた通りに跡がつく、これをフロアーパターン（床模様）と呼んでいる。歩いて花の形をつくったり、自分の名前をつくる。教師が黒板に描いた通りに動いたり、友だちの動いた通りにしてみたり、そのフロアーパターンを当てたりすることが出来る。また方向（前後左右斜）高さ、速さ、焦点、なども動きに変化を与える。

八、動きにおけるリズムの役割

速く動く、遅く動くなどのテンポ、一拍目にアクセントを置いてとびあがり、あとを普通に歩くなどの変化、歌や曲の節ごとに動作を変えるなどリズムによっても動きに変化が与えられる。レコードをきいて、手でうってあらわす。また詩をよんで手でうってリズムをあらわすなど。

九、打楽器と動き

打ちならして音を出すことは楽しく、また子どもたちにリズムを感じさせる。体のいろいろな部分でも工夫して音を出すことが出来る。足音、かかとの音、床を手でたたく、ひざを打ち合わす、舌、口唇などで音を出す、これらの音をテープレコードにとってみる。

次に手近にある玩具、台所用品、板鉄などを使っていろいろな楽器を工夫する。社会科で中国の勉強をして中国の楽器を作ったり、インディアンの楽器を作ったりというように学科との関連も出ている。創造力を働らかせて楽器を作ってみる。

大鼓…型、鋭どさ、大きさによって異なった音を出す、胴には木、鑵、その他いろいろ。頭になる部分もゴム、布、紙、その他いろいろ。バチも木で作ったもの、鉛筆、スプーンその他。

ガラガラ…中身は石ころ、ボタン、豆、ボールその他、小さいもの。例・紙のコップとボール。

打ったり、吹いたりして音を出すもの…大き

な貝がら（オーボエのような音を出す）、ガラスの器に水の量を変えて入れたものをスプーンで打つ、長さの違うくぎをぶらさげる（シロホン）、シンバル（なべのフタ）、トライアングル、カスタネット（貝）、タンバリン（紙のお皿）。

木の楽器…木片、木箱。

針金の楽器…バンジョー、ギター（タバコ箱などで作る）。

作った楽器を使って初め思いおもいに音を出させる。非常にうるさいが、それをさせる必要がある。次にだんだんにピアノ、歌、指揮者に合わせる。

ピアノの伴奏は上手である必要はないが、子どもたちを理解し、動きを把えることが出来なくてはならない。子どもたちが動作しながら話すことばを記録して口ずさみ、教師が手助けして歌を作る。レコードを聞いて感じをつかみ、動きについて話し合い、やってみる、打楽器で打ってみる。

十、動きと思いつき

動きの材料になるものが具体的に細かくあげてある。例えば、機械、乗物、動物、スポーツ、季節、職業、物語、音、色、絵、最近の経験（遠足など）、学科で学んだこと（外国の文化、歴史など）などの各々がまた細かく説明されている。結極、身近に経験する全てのものが動きの材料となるわけである。

また、休息のためには、空気を抜いた風船、縮まったゴム、とけたロウ、アワなどの案があげてあり「だんだん空気が抜けてとうとうペシャンコになりました」というような指示をすると子どもたちはその通りに動き、自然に休息に入れる。

十一、学校の教科における創造性

二学年担当のある教師が「時計」の指導をしたその案が書かれているが、各教科と関連を持たせて、国語、数学、音楽、社会、図工など、どの教科も同じ主題で通している。単に教師中心に「聞いて学ぶ」のでなく、子どもたち自身で本も読み、作文、音楽鑑賞、作詞などをする機会を与え、グループごとにリズムの動きをさせるなどして、本当に学習が子ども自身のものに出来るようにプログラムが仕組まれている。

（東京・あけぼの幼稚園）

幼児の教育 第五十九巻 第六号

六月号 © 定価 五十円

昭和三十五年五月二十五日印刷
昭和三十五年六月一日発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者 津守 真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。